所論諸論

梅原猛の人類哲学と国土

光多　長温

都市化研究公室理事長

今年1月、哲学者で国際日本文化研究センターの初代所長を務めた梅原猛氏が亡くなられた。梅原氏は日本人論、日本文化論において独特の世界を展開して、「梅原古代学」「梅原日本学」を創り上げ、その言動は常に世間の耳目を集めた。

「古事記」神話や法隆寺建立、さらには柿本人麻呂に関する独特の解釈を展開し、既存論説層から常に批判の的にもなった。

梅原氏はデカルト、ニーチェ、ハイデガーらの西洋哲学を人類普遍の哲学としてそのまま日本に適用するのではなく、自然と一体的な哲学、その神髄として「草木国土悉皆（しっかい）成仏」を根本思想とする新たな日本哲学を打ちたてた。この梅原哲学は、わが国における社会資本整備や防災の考え方と一脈通じるものがあると思う。

日本の自然観は基本的に縄文文化から来ている。縄文文化は世界の狩猟採集文明の中で最も発展した文明で、植物文化、農耕・漁労採集社会の文化を背景に持つ。自然と人間との距離が近く、植物や動物ばかりでなく山も川も生き物と考える。特に東北地方に縄文文化が色濃く残っている。柳田國男の「遠野物語」の中でも、自然と動物と人間とが一体化している民話がしばしば出てくる。縄文文化の特徴として「自然への恐れ」「自然への服従」がある。これは大災害に対する防災のあり様とも関係する。西洋文明は科学を成立させ、科学を発展させることにより自然を克服できると考える。欧米の災害対策においては「自然を克服」するという考え方を取る面が強いが、わが国ではそういう考え方は薄い。これは地震や津波、水害など、欧米よりも厳しい日本の自然・地盤条件もその要因の一つを成しているのかもしれない。

この「自然災害への諦め感」は、防災よりも復興に重点を置く傾向があることにもつながる。土木技術者の現場からは「わが国の土木工事においては、自然とどう『折り合いをつける』かが重要だ」との声をよく聞く。

梅原思想において欧米人は人間中心主義、日本は自然主義であると説かれる。日本では成仏した人を生きている人よりも一段上に見る傾向がある。大災害時、欧米では助かる可能性がある人から救助するのに比べ、日本は亡くなった人や瀕死（ひんし）の状態にある人から救助を行う文化が残っている。東日本大震災の時に、被災者が「死にそうな人、死んだ人から助けてください」といった他己的な行動をとったことも、これに起因するのかもしれない。

西洋文明は人間を中心に据える文化であるが、日本文化は植物中心の文化である。過去と現在、未来とを混然一体ととらえる。時間のうごめきの中で、春夏秋冬という季節が変化を現出する。そうした季節感を最も良く表現するのが植物であり、その植物中心の世界観が梅原哲学の基本となる。そこから、梅原氏がいう「繰り返しの美」が出てくる。わが国は宮中の行事なども数百年間、同じことを丁寧に繰り返す。「繰り返すことに価値を見いだす文化」である。また、針葉樹よりは落葉樹を好む傾向がある。これは日本人の自然意識と合致する。すなわち同じことの繰り返しである。四季があるため、季節感があり、同じことを繰り返すことも単調とはならない。むしろ、繰り返すことにより歴史の重みが加わり深みも増す。「移ろう美」である。季節変化がない国では繰り返しの文化は見られない。

この「繰り返しの美」は都市における建て替えの考え方にもつながる。ヨーロッパでは一度作った建物をそう簡単には壊さない。わが国では、建て替えの中に価値を見いだす。これも繰り返しの美の反映であろうか。